

## 佐賀支藩の蘭学について : 小城藩の場合

杉本, 勲

<https://doi.org/10.15017/2244048>

---

出版情報 : 史淵. 100, pp.73-88, 1968-03-01. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :



# 佐賀支藩の蘭学について

## —小城藩の場合—

杉 本 勲

—

日本の近代化にたいして一大導火線の役割をはたした蘭学の史的研究にとって、何よりも第一の基本的作業が、蘭書輸入の状況と輸入蘭書の所在（普及状態）の調査であることについては、多言を要しないであろう。輸入蘭書のうち、江戸幕府所蔵本は、以前から知られていた静岡の葵文庫（現県立中央図書館）収蔵本に加えて、三六三〇冊におよぶ大量の蘭書が上野図書館で発見されてからも、すでに一四年になる。<sup>(2)</sup> その他の全国にわたる諸藩等旧蔵の蘭書も、蘭学史研究者らのたゆまない努力によって、近来その大部分の所在があきらかにされ、蘭学資料研究会の編纂にかかる『明治前輸入蘭書所在目録』（仮題）の刊行も間近かである。

蘭書の所在調査について重要な作業は、蘭書の利用度の調査である。それには蘭書の講読状況を蘭書自体について吟味するとともに、その書写・抄出・翻訳の有無や程度を検討しなければならぬ。この仕事は蘭書輸入状況の研究にもまして困難な仕事であり、部分的には個別ないしは地域別研究も相当すすめられているものの、その全国的、総合的な究明は

まだまだ将来を期するのほかない現況である。

わたくしも年来右のような諸調査の協同作業に多少ともに参画してきたが、地域別の調査はやはり一定の地域に腰を落ちつけておこなわなければ、充分の効果のあがらないことを、これまでしばしば痛感してきた。幸い昨年から当分福岡の地に居をかまえて、対外文化交流史の研究にたずさわることになったので、九州地方の諸藩を主とした蘭書の落穂拾いをふくめて、この方面の蘭学関係史料の基本的調査に身を挺する覚悟で一応のプランもたて、機会をつくっては採訪に出かけることにしている。昨年は地元の筑前藩の調査に従事したが、九州諸藩中では比較的是やく蘭学に手がつけられたわりに、蘭書の手がかりは得られず、その他の関係史料も満足すべきほどには残存していないことを知った。<sup>(3)</sup>

そこで今年度は佐賀地方の調査にとりかかったのであるが、この地方は本藩鍋島家をはじめ、小城・蓮池等の支藩、それに本藩家老の武雄鍋島家にも多数の関係史料が伝えられ、今日その大部分を眼にすることができるといえる。

本藩鍋島家の蘭書についていえば、板沢武雄『日蘭文化交流史の研究』所収の「佐賀鍋島元侯爵家蘭書目録」には、七三二部にのぼる大量の蘭書名があげてある。それが昭和三二年の有馬成甫「九州方面訪書採料報告其五佐賀」（蘭学資料研究会『研究報告』二五）では、元鍋島家内庫所収蔵書としてわずかに九三冊が記録され、佐賀県立図書館に寄託になって以後の同館編纂の『鍋島本 蘭書目録』にも、蘭書一一八冊、英書三四冊ほどが数えられる程度である。いずれにしても、明治以後今日にいたるまでの間に、大多数が姿を隠したことになるが、この点の調査究明はまだできていないようである。

つぎに同家所蔵の洋学関係と漢書・古文書類は、内庫所収蔵分と佐賀鍋島報効会保管分ならびに東京渋谷の鍋島家事務所倉庫保管分が、あいついで佐賀県立図書館に寄託され、分類整理も進められて、ようやく閲覧に便するようになった。<sup>(4)</sup> これらの史料を利用した本藩蘭学史関係の研究著述には、周知のとおり『鍋島直正公伝』『佐賀藩海軍史』『佐賀藩銃砲

沿革史』といった戦前の書がある。『直正公伝』は佐賀蘭学の推進者で、  
蘭癖大名として著名な閑叟の代の蘭学の勃興について詳細な記述があり、あとの二著も軍事に関する専門書として参照すべきであろう。

また武雄については昭和三十一年石井良一の遺稿『武雄史』が刊行され、本藩にさきがけて「西洋文化輸入の先覚者」であった領主鍋島茂義とその子茂昌の二代を通じて、日本最初の種痘を同地でおこなった事実と、おなじく西洋砲術の先駆的導入の経緯を明かにしたが、蘭学史料に関するかぎり、前記有馬成甫「九州方面訪書採料報告、其四武雄」(『蘭研報』告二四)と、これをもととして三十七年刊行をみた『武雄の蘭学』において、現在、旧武雄鍋島家から武雄高等学校に寄託されている蘭書を主とした洋書類七〇部一三八冊が解説紹介され、前記茂義・茂昌の事蹟もより詳細に究明された。

## 註

- (1) 静岡県立師範学校『貴重洋書目録』参照。
- (2) 蘭学資料研究会『江戸幕府旧蔵洋書目録』参照。
- (3) 拙稿「筑前蘭学事始考」(『九州文化史研究』所紀要一一二所収)参照。
- (4) 佐賀県立図書館編『鍋島家蔵書目録』(其の一)昭和三十九年三月刊(其の二)昭和四一年三月刊、参照。

## 二

佐賀藩の蘭学は右のごとく、本藩とならんで武雄鍋島家がきわだって優位にあり、その研究もひととおり出そろっているのであるが、それではいわゆる佐賀の三支藩の蘭学はどうであったか？ 本稿の目標とするところも、表題のしめすとおり、これらの支藩における蘭学発達の事情を、筆者の数回にわたる関係史料の調査を通じて探りだすという点においてあるのであるが、これは以外に困難な仕事で、現在の筆者の調査段階ではようやく探究のいと口を叙する程度以上に出ら

れぬことを、あらかじめおことわりしておきたい。

さて佐賀藩が鍋島関叟の時代に、かれとならび称せられる鹿兒島の島津斉彬に一步さきんじて、西洋文化の導入育成に力をつくし、まず天保五年創設の藩の医学校に蘭学寮をおき（嘉永四年）、やがて蘭医方を本格化するため好生館を建設し（安政五年）、一方火術方を設けて洋式軍事訓練につとめ（弘化元年）、日本ではじめて反射炉を建てて大砲・小銃の製造を開始し（嘉永三年）、さらに化学工業技術の研究のための精練方を設置し（同五年）、さらに西洋型船舶の輸入（安政四年）から蒸汽船の建造に進み（慶応元年）、諸藩中抜群の海軍力を養成したこと、さらに欧米文化の趨勢を洞察して、蘭学より英学への転換をはかり、長崎に英学校（致遠館）を設けるにいたったいきさつなど、すでにひろく知られているとおりである。

いずれにしても幕末諸藩中で、佐賀藩の蘭学はひときわ卓越していたのであるから、各支藩にその影響がおよぶのは当然であろう。はたせるかな、関係史料は相当数残存しているのである。しかし筆者がいままで調査することができたのは、小城・蓮池の両支藩であって、鹿島の調査はまだこれからである。<sup>(1)</sup>小城鍋島家の旧蔵史料は、昭和三六年以降再度にわたり佐賀大学附属図書館に寄贈され、一応分類整理をおえて、『小城鍋島文庫目録』・『同続』が三七年六月と三九年一〇月にそれぞれ刊行されているし、蓮池鍋島家の旧蔵史料も佐賀県立図書館に収蔵され、三九年二月に『鍋島蓮池文庫目録』がプリントで公表されているが、両文庫ともに蘭学関係史料がいろいろとらず多数存在しているのである。

本稿ではスペースがかぎられているため、小城文庫の分を中心にするので、蓮池ならびに本藩文庫本とも対照しつつ、若干の史料的検討をおこない、この操作を通じて佐賀支藩の蘭学の発達について、何等か研究の手がかりを得たいと思う。

小城文庫正統目録に記載された蘭学関係文献（明治は四年の廃藩置県までに限定）の部門別数量は、筆者の計算したところでは、左表のごとくなる。

語 学	五部一 七冊
自然科学	一九一 四六
軍 事	二七一—一三三
社会科学	八一—一八
外国地理	二五一—七九
計	八四—二八三

このうちには輸入蘭書は一冊もあつてはなから、周知の Maatschappij : Grammatica of Nederduitsche Spraakkunst とおなじく Syntaxis of Woordvoeging の翻刻本『和蘭文典前編』(天保一三年)、『和蘭文典後編成句論』(寛政玄甫版) (喜永元年 同人版) ならびに Tiderpligting Jisgingius hurry-Oogen Ziekten・『人工体普録 Holland Word』(表紙記載名) の三部の蘭文写本がある。文典は珍しくないが、医書三部の写本は佐賀藩蘭医学史の究明にとって、貴重な存在である。

このうち Tiderpligting…… は表紙に Verpligting とのみあるが、これは令名の高かった Hufeland, C. W. : Enchiridion Medicum. Handleiding tot de geneeskundige Praktijk の最後編 De Verpligting des Geene-sheers.<sup>(2)</sup> すなわち医者の方々の義務を説いたものであることは、内容からみて明らかで、目録(続)の Tiderpligting… : は改められるべきであらう。非常に達筆なペン字写本で、なかに若干単語の和訳を記入し、裏表紙に「有斐堂蔵」と記してある。

ひたひ Oogen Ziekten は内題に De ziekten van het Netvies of het gezigt とあること、網膜と視力の病気についての論稿で、原著者は未詳であるが、前掲『佐賀鍋島元侯爵家蘭書目録』にもみえず、その道の資料として興味のある

ものである。というのは、ペン書きで一語一語和訳がつけてあり(もっともはじめの方が多いが)そこひ・盲目・近視・遠視等一八項にわたり、簡単に解説してあるからである。

なお『人工体普録』は書名も晦渋であるが、内容も蘭文九二章にわたる目次であり、筆者にはまだ正体がかめていないので後考にまちなたい。

つぎに翻譯書はみられるとおり、軍事関係書が圧倒的に多く、ついで外国地理書・自然科学書の順になっているのは、佐賀藩全体の蘭学の動向を明白に反映している。そこですくない方からみてゆくと、語学は意外にわずかで、大槻茂質(玄沢)の『蘭学階梯』と村上義茂(英俊)の『三語便覧』ならびに小山陶三径の『改正増補蛮語箋』(嘉永元年刊)しかみあたらない。社会科学の部も、加藤弘之『真政大意』・堤毅士訳『万国公法訳義』・箕作麟祥口訳『仏蘭西法律書』(民法)など慶応し明治初期の刊本ばかりであるから、ここでは問題にしない。

自然科学の部になると、大庭恣(雪齋)『民間格致問答』・田中綱紀『遠西奇器述』・青地林宗『氣海觀瀾』・川本幸民『氣海觀瀾広義』などの物理書と、緒方洪庵『扶氏(経験)遺訓』・大庭雪齋『体液究理分離則』そのほか訳者末詳の『人身究理』・『居家必要医療手引』、表紙に「問歇熱兼腕脇キン衝」とある写本などの医書がある。これらのうち『民間格致問答』は、佐賀藩蘭学者中で主導的地位にあった大庭雪齋が Johannes Buijs の Volks-Naturkunde を文久から元治二年にかけて六冊にわけて翻譯刊行した力作、問答体の原著を平易な口語文をもって草雙子風に記述してあるので、藩内ばかりでなく、当時の読者界にあえた影響力が大きかった。<sup>(3)</sup> 同文庫目録によれば、六冊の完本と二冊だけの欠本とが残存していることになっているが、残念ながら完本の現物は筆者の数度の調査ではみあたらない。ただし二冊本の第五巻末尾の奥書に「元治二年四月廿六日大庭先生より貰之、全六冊」と記し、  
福の印記もみられる。したがってこの本は著者から刊行早々全巻を福島某(名を清行と後出)に寄贈したものであることがわかる。

緒方洪庵の『扶氏經驗遺訓』は前記 Hufeland の *Enchiridion Medicum* の訳(二六卷)であるが、小城には二冊の端本しかない。ただ注意すべきは、この書物も天保一四年ごろ洪庵の適塾に入門した雪齋が参校していることである。若干の書入れがあるが、これも書体からみて福島清行のものであろう。

やうに『体液究理分離則』はドイツ人プレックの著の蘭訳本、すなわち *Plenk, J.J.: Heelkundig Mengelwerk* *vertall door Bake, H.A.Utrecht.* を雪齋がやうに重訳したものと思われ、<sup>(5)</sup>四卷二二〇枚におよぶ力作である。その訳業の由来は雪齋みずから序言に詳しく述べているので、その要点を摘記すると、藩主閑叟公がつとに西洋医学に心をいたし、医学校を興して雪齋もその教導に任せられた経緯を称揚し、これに報いるの志をもって、『解体新書』・『医範提綱』等ののちに学ぶべきものとして、家蔵のプレックの書を和訳するに決したという。ただこの書の刊行は一八〇七年で、「今(安政五年)ヲ去ル事五十一年ナリ。西洋ハ蓋シ日新ノ学ニシテ、今日ハ昨日ヨリモ精シ。故ニ我邦ノ学者亦争テ新著ノ書ヲ好ミ、大抵二十年前ニ出タル者ハ旧本ナリトシテ称誉セズ。是亦所謂ル本ヲ忘レテ末ニ走ルノ風習ニ懼レルカ」と、当時の学界の通弊に一矢を投じ、「日東ニ実学ノ行ハル、事纔ニ五十年ナリ。仮令賢方博識ノ人タリトモ、其業恐クハ未タ西洋ノ百年前ニモ及フ能ハザル事遠カラシ。若シ然ル事アラバ、五十年前ノ旧物タル此書ノ如キモ尚且ツ新著ノ書ナルヘシ」といった見識をもって、あえて訳述したと記しているのである。

その内容の一端を紹介すると、(序説)「分離学雅名小引」・(卷一)「人体元素」・(卷二)「血液」・「神経液」・「鼻孔粘液」・「唾液」・「咽喉粘液」・「(眼部)水晶液」・「涙液」・「喉頭腺液」・(卷三)「肺臓吸気・呼気」・「肺臓粘液」・「乳汁」・「胃液」・「臍汁」・「睪液」・「胆汁」・「腸内糞質」・「腎腺液」・「尿」、(卷四)「尿頭粘液」・「溼護液」・「男精」・「膾粘液」・「女子精液」・「子宮腔液」・「卵巢液」・「月経血液」・「胎児液」・「関節液」・「骨中液」・「全身套皮液」・「死後人体腐敗」など、体液全部にわたって詳しく解説し、訳語も

今日とほとんど同様の名称で、なかでも雪斎「自ラ熟字ヲ作テ対訳」したものが多し。筆者は医学上の批判はむろんできないが、間々文字・文章を訂正した箇所があつて原本に近い感をあたえられる。他に写本をみないとすれば、きわめて珍重さるべき文献であろう。

つぎに『抱氏人身窮理』（三巻一冊）は、冒頭に「喁蘭 抱道英先生 口授」とあり、ほかには手がかりになることは記していないが、抱道英はその発音より推してポードイン（(Baudin, A.F.)を指すものと考えられる。ポードインはいうまでもなく、ポムペ（Pompe, M.Van）の帰国後幕府が長崎医学所（改称して精得館という）に招聘したオランダ陸軍一等軍医で、わが国の医学教育と新治療に貢献するところ大きく、ことに眼科治法をよくし、わが国の西洋流眼科はボ氏によって大いに発達したといわれる（<sup>6</sup>）してみればさきにあげた Oogen Ziekten もあるいはボ氏の用いたテキストかもしれない）。この書もボ氏の口述を筆記したテキストであるから、おそらく佐賀藩から長崎に学んだものも、このテキストを使用したものと想像される。内容は生理学概説で、とり立てていうこともない。

『居家 必用 医療手引』（一八五五年発行と記す）は小冊ではあるが、はじめに

○長生略論 扶歇蘭土ニ従フ

とあり、扶歇蘭土は前出の Fufeland であるから、これはフーフェランドの Enchiridion Medicum あたりから、長生法を抜粋したものと思われる。前半に一般論をのべたのも、「是ノ他ノ事件ハ名誉ナル扶歇蘭土ノ貴価ノ冊子ニ論ズルヲ観テ、生命延長ノ術ヲ知ルベシ」とことわって、胃弱・痔疾・便秘以下長生を阻害する病気の療法を説いている。

もうひとつ医書ではないが、やはり大庭雪齋訳述の『算字算法基原或問上篇』をあげよう。あいにく四・六巻しかないが、この書の原本は『佐賀鍋島元侯爵家蘭書目録』度学並算学書の部にのせてある

ヤーコップ、デ、ゲルデル

五、一アルレル、エールステ、ゴロンデン、デル、セイフルキュンスト

算字学

一冊

にあたり<sup>(7)</sup> Gelder, Jacob de : Allerste gronden der cijferkunst を指すと考えられる。内容は算数の基本原理を問答体をもって例解したもので、訳年の記入はないが、雪齋がこの書を出したころ、日本ではようやく和算にかわって洋算が導入されつつあった時期にあたっていたから、これまた数学史上逸しえない文献であろう。

以上のごとく、小城文庫の自然科学書には三部の蘭文医書の写本もあり、和訳医書写本にも注目すべきものが数点あるのにたいして、蓮池文庫には『扶氏経験遺訓』の写本(一〇冊)があるほか、医書はまったくみえず、本藩鍋島文庫の医書の部もほとんど刊本であって、小城にあるような写本類は皆無である。とくに大庭雪齋の著者のうち、『体液究理分離則』と『算字算法基原或問』の二書は、最近の研究論文、古田東朔「大庭雪齋」にももれており、今後雪齋の究明にとつては不可欠の文献とされよう。

註

- (1) 鹿島関係文書は現在鹿島市祐徳神社と鹿島鍋島邸に保管されており、その整理にあたった三好不二雄教授の教示によれば、蘭学関係史料はほとんど眼につかなかったということである。
- (2) 日本学士院編『明治前日本医学史』第三卷一四〇頁参照。
- (3) 大庭雪齋と『民間格致問答』については『鍋島直正公伝』第三編二六三―五頁ならびに古田東朔「大庭雪齋」(蘭学資料研究会『研究報告』一四二)等参照。
- (4) 前掲、古田一―二頁参照。
- (5) 各巻の冒頭に

体液究理分離則卷一 千八百零七年鏤行

独乙大学士

伊依布連吉 著

和蘭産科教授

華亜 抜介 訳

西肥佐嘉

大庭雪齋 重訳

と記してあるだけで、原書名は記していないので、しばらく本文の書名をあててみた。なお内容の対照点検が必要であろう。

- (6) 佐藤栄七『日本洋学編年史』六三四頁。
- (7) 『日蘭文化交渉史の研究』六四九頁。
- (8) 蘭学資料研究会『研究報告』一四二号。

## 三

つぎに外国地理書に眼をうつすと、その大部分が刊本で、しかも米人樟理哲『地球説略』(一八五六)・英人慕維廉『地理全志』・陳逢衡『英吉利紀略』のごとく、中国で漢訳刊行されたものの和刻本がいくつもあり、これらは別に珍しいものではない。国書のうち、箕作寛省(阮甫)『坤輿図識』(弘化四年の同補とも九冊)は、本藩主鍋島閑叟が弘化二年(一八四五)の刊行直後、これをもとめて感想の絶句を寄せ、安政三年(一八五六)阮甫が長崎へゆく途中、佐賀に宿したときも引見して、その労をねぎらったといういわくがあり、そのころの世界地理書中で閑叟が強く感銘しただけの好著である。<sup>(1)</sup>写本のうちでは夢遊道人すなわち山村才助『西洋雜記』(二冊)・安積信『洋外紀略』(三冊)や、ゴロウニン原著、青地盈(林宗)訳、高橋景保校の『奉使日本紀行』(一〇冊)などがあげられるが、奥書・書入等をまったく欠いているため、数が多いにしては、問題になる書物はないようである。

さて一番数の多い軍事関係書は、林子平『海国兵談』(三冊)・高橋景保編『近時海国必読書』(一〇冊)・塩田順庵『海防彙議』(三三冊)などの海防書の写本が数部残っているほか、大部分はオランダ兵書類であるが、そのうち刊本が九部であるのにたいして、写本が一二部もある。しかし軍事関係書は蓮池に七五部もあり、鍋島本藩は調査未了のため数字の明確は欠くが、目録から算出したところでも、蓮池を優に凌駕している。もとより蘭書七百余部うち軍事関係書一五五部を所蔵し、幕末軍事技術で薩藩と雌雄を競った佐賀藩のことであるから、和本軍事関係書も圧倒的に多かったことは想像にたたくなく、支藩も幕末には佐賀藩長崎警備の一翼をになって、小城・蓮池は伊王島、鹿島は沖ノ島など受持ちの守禦地も定められていたから、<sup>(2)</sup>多数の兵書(とくに写本類)が残っているのは驚くにあたらない。ことに蓮池では八世藩主直与(雲叟)が兵学を力をいれ、長崎より高見浅五郎を招いて鍛造所を設け、巨砲数十門を鑄造したといわれているから、<sup>(3)</sup>現

存書でみるかぎり、本藩に匹敵する兵書を残しているのも、充分首肯しうるものである。武雄鍋島家所蔵の和本兵書がみあたらないで残念であるが、武雄の西洋砲術がはじめから本藩をリードする力をもっていたことは、前記『武雄の蘭学』によって知ることができる。

右のような情勢のもとで、小城支藩はすこぶる見おとりがするが、それでも同藩は鍋島三支藩中では最大であり、明治三年（一八七〇）兵部省の『全国銃砲調査』によると、小城は、大砲六門、小銃六三三挺を装備し、蓮池の大砲四門、小銃五一五挺より優勢である。もともと明治四年の『大小銃仕分帳』によると、武雄軍団の大砲一七門、小銃八五〇挺、佐賀武庫所（本藩）の大砲九門、小銃一三三挺という数字がしめされているので、小城は小銃はともかく大砲では武雄の足もとにも寄りつけないわけである。

そこでめぼしい兵書を二・三あたってみる。鈴木春山の『兵学小識』（二一冊）はどこでもみかけるものであるが、小城本には若干の書入れのあることを注書しておこう。つぎに『海上砲術全書』について、小城には表紙『ゼーアル』、内題『ゼーアルチルレリー』翻譯海上砲術全書』二一冊本があるが、本藩には一五冊の端本が伝わっており、蓮池には表紙に『濫阿兒啣而喇』、内題に『ゼーアルチルレリー』と記した二〇冊本がある。それらの原著は、幕末の海軍砲術に関する宝典として尊ばれた *Calten, J.N. O Leiddraad bij het onderdicht in de zee artillerie 2de druk*, の一八三二年版で、<sup>(6)</sup>上記の佐賀本支藩本は天保一四年（一八四三）杉田立卿ら幕府天文台訳員により二八巻本として翻譯されたものの写しである。これとは別に小城には尺并斤量訳『レイドタラード』という一九冊本があり、同名のもの端本は本藩にも三部ある。この訳本に関しては、前掲『佐賀藩銃砲沿革史』に、佐賀藩では精煉方に設けた蘭学寮で、石黒寛次等を中心に「訳出するに従って研究の歩を進めし」めた原書籍の一つとして「新訓海上砲術全書（千八百六十一年著）」をあげてあり、<sup>(7)</sup>おそらくこのカルテンの増訂新刊本の、佐賀藩における翻譯をさすものと考えられる。

右のカルテンの訳本のあいだには、それぞれ異同があるので、比較参考の一端として、三者の目次第一頁を左にかかげてみる。

蓮池本	小城本	小城本
遊阿児啞而啞	海上砲術全書	レイドタラード
第一卷 第一章	第一卷 第一章	凡例
合薬の事	合薬の事	第一章
硝石木炭硫黄合薬 に火移溶和の事	硝石	合薬
加調薬品の事	木炭	硝石
	硫黄	木炭
	合薬に火移溶和 の事	硫黄
		合薬に火移して溶化の事

なお訳者の尺并斤量はむろん変名で、いまのところ本名は未詳であるが、すでに官撰の旧版がでているので、これをはばかり、撰者未詳の砲術書『斤量尺度篇』にちなんでこの変名を使ったものではないかと思われる。

このほか Mulken, J.J. Van : *Handleiding voor de evolutioen ende manoeuvres der drei Wapens : infanterie, kavallerie en artillerie*. の鈴木春山訳『三兵活法』（一〇冊）や杉田成卿の『熾磁用法』（三冊）などの写本もあり、また『練熾手法』（二冊）・伊物・齋色勒膚（蘭人）『泰西海陸必要正真火器製造書』（五冊）『新編西洋砲術火具篇補遺』など、本藩文庫や蓮池文庫にも同書名がみあたらず、『洋学編年史』等にもっていないものも二・三あるが、紙数の関係でその考証は省略する。しかしこれらは兵器の研究製造に群を抜いていた佐賀藩関係書として軽視できないであらう。

註

- (1) 前掲『鍋島直正公伝』二六五、六頁。
- (2) 同右、第四編一四一頁。
- (3) 佐賀県学務部学務課『佐賀県郷土教育資料集』五七七頁。
- (4) 前掲『武雄の蘭学』六三頁所引による。
- (5) 同じく六二頁所引。
- (6) 蘭学資料研究会編『江戸幕府旧蔵洋書目録』一四頁参照。
- (7) 秀島成忠『佐賀藩銃砲沿革史』三六九頁。なお右の江戸幕府の目録にも一八三二年のほか、一八四二年刊本しかみえない。

四

小城文庫に残存する蘭学関係史料を、蓮池・本藩両文庫と対照しながら、ひとわたり調べてみた。その結果、数量上では蓮池とくらべてみても、かならずしも優勢ではなく、とくに兵書でははなはだしく見おとりがするが、なかには『海上砲術全書』と『レイドタラード』の関係など、軍事史研究にとって興味のあるものもある。医書を中心とした自然科学書の方では、蓮池とは質量ともに比較にならず、本藩の欠を補いうるものがいくつか目についた。全体を通じて小城の蘭学関係文献は、一支藩としてはよくととのっており、その点隣の福岡藩の秋月支藩の場合とくらべても、たしかに注目しに値しよう。それではこのように貴重な数々の文献を残した小城藩の蘭学発達の状況はどのようにならいいか？ 最後にこの点について考えてみたい。

まず従来知られている蘭学史上の事績であるが、関係諸文献にあたってみても、ほとんどまったく出てこない。たとえば『小城郡誌』の「旧家人物」の章にも、特別に洋学者として活躍した人物の事績は皆無である。もちろん男爵富岡敬明・同松田正久・子爵波多野敬直・菊地常三郎など、小城藩出身で明治以後も各方面で頭角をあらわした人々は、必ずや洋学を身につけたにちがいないが、かれらは藩校興讓館で儒学の課業を受けたのち、郷関を出て各地に遊学しているのであ

(1) 同書にはその他の人物の欄で、小城郡の三二人の儒学者、二一人の国学者にならんで、洋学者はたった一人袋久平という名をあげているばかりである。(2) また『鍋島直正公伝』や『佐賀藩海軍史』・『佐賀藩銃砲發達史』などにも活動のあとは見えない。ただ一つ『伊東玄朴伝』所載の「門人姓名録」(3)によると、象先堂の佐賀の門人四人中、小城は堤柳翠・水町玄道・宮崎元益・神代玄哲（破門）・斉藤玄周・石動貫吾・香田文哉・宮崎元立・村田有山の九人、蓮池は一人、武雄は四人とあるから、小城人で蘭学を志し東都に遊学したものもすくなくなかったわけである。

このように小城の蘭学者の事績はいまの筆者にとってはまったく未詳というほかないが、このことは興讓館の教育内容に洋学が加えられた形跡の不明確なこととも関連がある。

さきにもふれたように、実は小城文庫蘭学関係書には、福島清行の署名がいくつかみえ、また筆蹟からも同人の手写ではないかと思われるものもある。ことに『民間格致問答』は大庭先生より貰ったと奥書しているところから察すると、この人は雪齋の門弟として、師の信頼を得ていたにちがいない。『氣海觀瀾』などにも「福島清行蔵書」と明記しているし、小城文庫はかならずしも藩主旧蔵書とはかぎらないこともわかる。この人の事績を知りたいと思つて、いろいろ探索したが、いままでの調査では、佐賀藩蘭学関係者中では「明治二年藩軍事局役人名簿」に、海軍所海軍少幹事福島徳之助の名のっているくらいのものであるが、清行とこの徳之助との関係もわからない。(5) 佐賀藩史上にもし名を残さなかつたとすれば、あるいは早世したのかもしれない。これらの点についてお気づきの方があつたならば、御教示願いたいものである。

小城藩学の実情がこのように不明瞭なのをたいして、蓮池支藩の方は相当活発な事績を伝えている。同藩蘭学の鼻祖は、おそらく佐賀藩全体としてもっとも早い島本竜嘯（良順）である。(6) もと蓮池の町医者出身であるが、すでに寛政末から長崎に出て蘭学を修め、帰郷して蘭方医となり、蘭書を講じた。幕末蘭学の泰斗伊東玄朴も竜嘯の弟子である。竜

嘯は天保五年（一八三四）佐賀蘭学寮が設けられると、寮監に任せられたが、のち蓮池藩の侍医をもつとめた。蓮池では八世藩主鍋島直与（雲叟）みずから「当年の諸侯中に洋学者を以て称せられた」<sup>(7)</sup>ほどの蘭癖大名であり、『仏蘭察誌』・『欧羅巴諸図』等の著書もあったほどであるから、前記のごとく長崎から高見浅五郎を招いて大砲の製造を開始し、また高島秋帆の門人で長崎の洋学者であった山本晴海をも召しかかえて砲術師範とするなど、<sup>(8)</sup>蘭学育成の実情を想見するに足るものがある。

もともと維新期の近代的洋式軍備の上では、藩の財力規模からみて当然ではあるうが、小城の方が蓮池よりややまさり、戊辰の役にさいしては、本藩、蓮池・武雄の軍団とともに小城軍も東国各地に転戦し、勝利をおさめたのであるから、<sup>(9)</sup>佐賀支藩の蘭学も軍事技術の導入に関するかぎり、他藩に比較して数等進んでいたことがわかる。小城における蘭学の意義も、結局こうした軍事技術の優位という点にあると思われる。しかしそのような実情を明かにするには、小城文庫に蔵せられている大部の藩政関係文書・藩日記を涉猟する必要があり、それは今後に残された課題である。それとともに大庭雪斎の影響力が、医学・物理学・数学等にわたり大きかったことも、あわせて再吟味さるべき課題であろう。

註

- (1) 小城郡教育会『小城郡誌』四六三～四六五頁参照。
- (2) 同右書、四七四頁。
- (3) 伊東栄『伊東玄朴伝』附録、一～一六頁参照。
- (4) 小城文庫本『蘭学階梯』の表紙には Hoekoesima（福島）裏表紙には Kijota（清行）の署名がある。
- (5) 秀島成忠『佐賀藩海軍史』二三八頁。
- (6) 島本竜肅の略伝は前掲『伊東玄朴伝』修学、一四～一八頁参照。
- (7) 前掲『佐賀県郷土教育資料集』五七七頁。
- (8) 『日本洋学編年史』四二五頁。
- (9) 『鍋島直正公伝』第六編参照。

佐賀支藩の蘭学について（杉本）

八八

〔付記〕 小城文庫・蓮池文庫等の調査にあたり、佐賀大学や佐賀県立図書館の方々に種々御高配を頂いた。この機会に  
深謝したい。